松山市

居酒屋ホヤケン

俳人夫妻営む「俳句BAR」

松山を代表するショッピングエリア・大街道商店街や松山城などの観光地で賑わう大通りから少し離れた三番町通りには、美味しいお酒と料理を楽しみながら一句詠むこともできる「俳句バー」がある。慣れ親しんだ常連客やふらりと立ち寄ったおひとりさま、俳句カルチャーに興味津々の外国人観光客など様々な人々が、店主の門屋哲司さん・朋子さん夫妻の待つ店内に足を踏み入れる。

ほの明るい照明の光が落ちる店内は、隣との距離がほどよい10席ほどのカウンター席と、奥には個室のテーブル席が用意されている。見回すと、棚のあちこちに昭和レトロを感じさせる小芥子やまねきねこなどの小物、カウンターの中で積まれた食器には砥部焼も混ざり、さりげないこだわりを感じる。

一番人気の玉子焼き。分厚くふわふわで、出汁のうまみがじんわり広がる

東京で出会い結婚した門屋さん夫妻は、2000年頃に哲司さんの地元である松山に移住し、居酒屋「ホヤケン」を開業した。自宅や職場とは異なる第三の居場所を目指した空間は、地元住民に愛されるくつろぎの場だった。

「俳句バー」の要素が加わったのは17年。きっかけは、インバウンド需要の獲得を目指し、松山市・旅行会社のJTB・俳句雑誌の出版社のマルコポ・コムが、文学のまちというイメージを活かして繁華街の店を紹介する企画だった。そこに携わっていた俳句仲間から直々に要望があり、門屋さん夫妻は「俳句バー」としてのサービス提供を始めた。

店内には約1000冊の個性豊かな古本が揃う

二人の俳号は「暮井戸（ヴォイド）」と「時計子（トケコ）」

店内には歳時記や英語の俳句ガイドブックが置かれ、初心者や外国人でも気軽に作句できる。「海外の方は母国語で俳句を作ることが多いです。昨日来店したフランス人のお客さんは日本語が流暢で、漢字も使って一句詠まれていました」と、朋子さんは感嘆した様子で話す。

好評を博すのが、哲司さんが希望者の趣味、好きなもの、出身地などのプロフィールからオリジナルの俳号（俳句を作る際の雅号）をつけるサービス。6月時点で名付けた俳号は350にも上り、中にはその後全国規模の俳句コンテストで受賞した人もいるという。哲司さんは「あくまで洒落」と前置きしつつ「ほとんど俳句に馴染みがない人に、お土産代わりに俳号をつけたのが始まりでした。俳句に興味を持つきっかけになれば面白いですね」と語る。

古本屋としても営業中

もちろん同店の人気の理由は俳句のサービスだけではない。コロナ5類移行後に増えたアジア人観光客のお目当ては、密かな評判メニュー・焼きそば。口コミサイトの高評価を見て、こぞって訪れるという。

また店内に所狭しと並ぶのは、ジャンルも時代もバラバラな古本。実は、数年前に来客した古本屋店主に背中を押されたのをきっかけに、「古書ほやけん洞」として古本の販売もしており、お酒を飲みながらの試し読みも歓迎だ。

朋子さんは「俳句バーも古本屋も、周囲の誘いに乗っかって始められたこと。いろんな人に助けられて、流れ流されるまま気づけば23年やってこられました」と朗らかに笑った。

英語の俳句ガイドブック（左）、哲司さんの句が表紙で取り上げられた俳句雑誌

目を引く看板の数々に引き寄せられる人も多い

居酒屋ホヤケン
営業時間　18～23時
（日曜定休）
愛媛県松山市三番町2－5－17
☎090・9250・1839

松山市

「ことば」で興すまちづくり

『ふるさと』をようけ詰めて送るけん」「鈍行で行け、周りが良く見える」――松山市内のいたるところで、エモーショナルに訴えかける言葉に出会う。俳人・正岡子規の故郷で、夏目漱石の代表作「坊っちゃん」や司馬遼太郎の往年の名作「坂の上の雲」の舞台であり、文学的土壌に富む松山市。「ことば」が綴られた路面電車や、その場で思いついた句を投句できる「俳句ポスト」などが様々な場所に馴染むこの街では、「ことばのちから」によるまちづくりを行っている。

松山市の交通の要・路面電車には「遠回りだって僕の道」

ことば×街

空港の階段には「用もない電話に親は安堵する」「故郷離れ手が伸びるのは愛媛産」「頑張らなくてもいい楽しんでおいで」「明日はアタシの風が吹く！」と、旅立つ県民の想いに寄り添った言葉が並ぶ。

松山城に向かうリフトで目線を下に向けると「ことば」が連なっていた

路面電車の車体上部には「進み続けりゃゴールに届く！」「遠回りだって僕の道」「『どうぞ』と8歳『ありがとう』と80歳」と、市内観光に想いを馳せる旅人をわくわくさせる言葉が行き交う。

街並みがCM等で放映されると県外から「路面電車に書かれたことばを見て感動した」「松山に行ってみたくなった」という声が寄せられるなど、PR効果も高い。

同実行委員会の事務局を置く文化・ことば課の宮内啓さんは「市外から戻ったときに街中で『ことば』が流れているのを見ると、松山に帰ってきたことを実感する」と、日常生活に「ことば」がある風景が当たり前になっていると話した。

松山城長者ヶ平の第1号俳句ポスト

俳都松山俳句ポスト

思ったこと、感じたことをすぐに投句できる「俳句ポスト」は、1968年の第1号設置以来、松山市内87カ所、県外14カ所、さらに海外（ベルギー・ドイツ・台湾）6カ所に設置されており、観光客や市民に愛されている（23年10月現在）。22年度は市内の俳句ポストから7440句が集まった。

13年からは俳句投稿サイト「俳句ポスト365」が始動。ポストがない県外地域や海外など、誰でも・どこからでも気軽に投句ができるようになった。

俳句ポスト365

内子町

大江健三郎ゆかりの「谷間の村」

今年3月に亡くなった小説家・大江健三郎。1958年に閉鎖された村に住む少年と黒人兵をめぐる悲劇を描いた「飼育」で芥川賞を、94年に川端康成に次いで日本人2人目のノーベル文学賞を受賞するなど、日本を代表する文豪の一人だ。

大江は1935年、内子町中心部から北東に10kmほどの旧大瀬村で生誕。大学進学のため松山東高校に編入するまでの16年間を過ごした。「飼育」や、最後の小説と位置付けた長編「燃え上がる緑の木」などの作品にたびたび登場する「谷間の村」モデルの地。55年に内子町と合併したが、郷愁を誘う風景に、大江が過ごした日々に思いを馳せることができる。

村役場時代の外観を再現して改修された「大瀬の館」

宿泊施設「大瀬の館」

内子駅から車で山道を上ること15分。小田川沿いから少し逸れたところに、木造2階建ての屋舎が構える。地域の中核村役場は、廃村と同時に役目を終えたが、地元住民からの「再び地域活性化の拠点にしたい」という声を受け、99年に改修。「大瀬の館」と名を改め、宿泊施設や地域の交流の場として活用されている。

1階の交流ラウンジにはかつて月に400人もの住民が来館し歓談を楽しんでいた。現在は高齢化が進み20人ほどだが、毎週日曜日には喫茶が開かれ、変わらず地元の人たちの憩いの場となっている。展示スペースには大江の書籍が揃い、ノーベル文学賞を受賞したときや、久々の帰郷にはにかむ写真も。さらに「谷間の村」と大瀬地区を重ね合わせ、「テン窪」や「杉十郎と呼ばれる大杉」など、作中の架空の場所を記した地図はファン垂涎ものだ。

左は小田川沿いで撮影された写真

のどかな風景と近代的な建築のコントラストが目を引く

宿泊者が自由に書き込むノートには「敬愛する大江の故郷を感じられた」「久しぶりの宿泊で逝去を悼む」と、思い思いのメッセージが後を絶たない。

2階の宿泊部屋はい草が香る和室で、宿泊は1日1組限定（1泊4000円。2人以上の場合1人3000円）。町内を観光する家族連れ、四国八十八カ所を巡るお遍路さんの利用も多い。運営は地元ボランティアが担う。

知己の仲が設計した中学

大瀬の館にほど近くに、大江の母校・大瀬中学校がある。存在感の強い円柱型の建物やギザギザ屋根が目立つ外観は、一目見て学び舎と気づかない。

校舎はコンクリート打ちっぱなしと木造部分がひと繋ぎで、和洋折衷を感じさせるつくり。教室を隔てる壁や行き止まりが少なく、行き来がしやすい。広い建物内の造りは、何一つとして同じものがない。

最も特徴的なのは、円柱型にそびえる音楽ドーム。部屋の中央に立つと全方向から同じように声や音が反響する完璧な設計となっている。大江が交友のある演奏者を呼び、住民向けに開催していた「谷間の村の音楽会」の会場でもあった。

設計したのは、京都駅ビルや札幌ドームも手掛けた建築家・原広司氏。大江と旧知の仲という縁から引き受け、94年に完成させた。

同校は見学も可能（要事前許可）。大江が亡くなった3月以降は、毎日のようにファンが来訪したという。近代的な造形美も非常に評価が高く、公共建築百選も受賞した。

冒険家
河野兵市

日本人初・北極点単独徒歩達成

家族が伝える「あきらめない強さ」

冒険家・河野兵市（1958～2001）は佐田岬半島の旧瀬戸町（伊方町）出身。みかん農家で鍛えた強靭な肉体、何より「行ってみたい、やってみたい」という好奇心で、世界中を徒歩や自転車で駆け巡った。97年には日本人で初めて北極点への単独徒歩を達成。その帰りに遭難し、43歳で生涯を閉じた。長男の遼兵さんは没後20年の2021年より、兵市の生き様を伝える講演活動を開始。「冒険とは、一歩踏み出す勇気のこと」の言葉を残した。

「家ではごく普通の父」と遼兵さん（4歳当時）

兵市の旅は1978年にはじまる。会社を1年で辞め、自転車で日本一周1・6万kmを走破。10年後の88年には徒歩での日本列島縦断も達成している。この間、オーストラリア大陸自転車縦断、北米最高峰マッキンリー（6194m）登頂、南米大陸自転車縦断など旅先は数知れず。移動手段は徒歩・自転車・カヌーで、ほとんどが単独でのチャレンジ。時間さえあればアルバイトをかけもちし、資金にあてた。

87年にはヒマラヤのナンガパルバット（8125m）に挑戦。キャンプ地が雪崩に遭い、部屋一つほどの大きさの氷が兵市を直撃、顔面27針の重傷を負った。

その時につきっきりで看病をしてくれたのが、炊事などの手伝いで現地に来ていた順子さん。2人の出会いだった。

遼兵さんは「身体表現として過酷な旅に挑む父を一番理解し、支えたいという気持ちが一番強いのが母です」と話す。

2人の子供が生まれた後も旅を続けた兵市。たまに家に帰ってきたときは一緒にご飯を食べ、遼兵さんとお風呂に入り、トランプで遊んだ。「単身赴任みたいで、寂しくはなかった。父は私の学校の話をよく聞いてくれました。旅の話はほとんどなかったですね」（遼兵さん）。順子さんはご馳走を作るわけでもなく、気張らず普通の家族の時間を大切にした。

何もない真っ白を進む

北極は大陸ではなく氷の塊。海流で常に動くため、地上に明確な北極点の目印はない。「自分が歩いた氷は、今はもうなくなっているかもしれない」。そこに兵市はロマンを感じた。

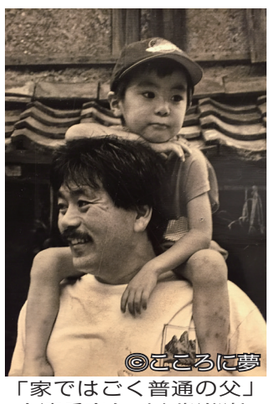
実は北極の氷の厚さは平均2mほど。「落ちると氷点下の海。常に氷の状態を見極めて進みます」（遼兵さん）。氷どうしがぶつかり、岩場のような起伏が多く、足場も悪い。目の前は真っ白で目印もなく、手元のGPSの数値だけが頼り。北風は常に向かい風で、氷ごと海流で押し戻されるので、1日で進む距離は6km程度だそうだ。

北極点へ向けソリを引く

兵市は日記をこまめにつけていた。「北極点には希望という言葉はない。希望という言葉を考えるだけでつらくなる。希望を持つことが自分の気持ちを駄目にしてしまう。でも、ネバーギブアップ、あきらめないことだ。自分の冒険は前に進むしか終わらない。進め」。遼兵さんが好きな言葉だ。

冒険開始から2カ月後の97年5月2日、ついに単独徒歩で北極点へ到達。世界で3人目、日本初の偉業だった。到達の瞬間、GPSで位置を確認しソリに腰を掛け、紅茶を飲んだ。見上げるとブルースカイが広がっていた。「よかった」という安心感、満足感だけがあった。

次の目的地は1・5万km離れた地元・瀬戸町への「リーチング・ホーム」。ところが、北極点から700km進んだ場所でクレバスに落下。その後、遺体が発見された。当時、小学2年生だった遼兵さん。家族全員でカナダへ行き、父、兵市と対面した時に、ようやく亡くなったことを実感したという。「それでも普段通り学校に行き、変わらない生活が続けられるよう気丈にしていた母の姿を覚えています」。



「家ではごく普通の父」と遼兵さん（4歳当時）

リーチング・ホームの最終到着予定地・佐田岬半島の瀬戸農業公園には記念碑が。手前に兵市氏の足型

没後20年の節目に愛媛県が初の企画展を開催。遼兵さんが講演活動を始めるきっかけとなった。企画展を記念し絵本「おうちへ帰ろう」（非売品）を自費出版。兵市が旅の道中に構想した童話のアイデアを、順子さんと遼兵さんが形にした。

「自分も仕事で難しいことがあると、ついできない理由を探してしまう。そんな時に父の言葉『冒険とは、一歩踏み出す勇気のことだ』が奮い立たせる」と遼兵さん。「父の活動を聞いて、少しでも元気、やる気が出たという人がいれば嬉しいです」。

遼兵さん。スポーツマーケティングの会社に勤めながら、兵市氏の遺志を継ぐ「こころに夢」を順子さんと設立